

在宅看護論演習における授業方法とその学習成果に関する文献研究

西崎未和¹⁾ 菊地球緒¹⁾ 蓮井貴子¹⁾

要 旨

在宅看護論の演習について、文献をもとに授業方法とその授業方法によって得られた学習成果を明らかにすることを目的とした。在宅看護論・在宅看護学・在宅看護実習をキーワードとして文献検索を行い、原著論文であり授業方法と学習成果が明示されているもののうち、演習に関する7件を対象として分析を行った。その結果、看護過程展開、地域の社会資源の地図作成、補助器具センターでの校外授業について、それぞれの学習成果が紹介されていた。また、ここからグループ学習とロールプレイについて更に分析したところ、在宅看護に必要な視点を体験する、現実的な対象のイメージ化につながる、個別的な援助方法を工夫するなどの学習成果が明らかになり、在宅看護の特徴について体験的理解につながる事が示唆された。

キーワード：在宅看護論演習、授業方法、学習成果、ロールプレイ、グループ学習

I. はじめに

平成9年に保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則に在宅看護論・在宅看護論実習が位置づけられて10年が経過した。この間、各看護師等養成機関では、様々な教育の取り組みがなされ、また研究・実践においても、在宅看護は地域看護学の中で公衆衛生看護・産業保健・学校保健と並んで、新たな分野として定着、発展しつつある。一方、在宅看護を取り巻く状況は、在院日数短縮によるケア内容の高度化・多様化、在宅ターミナルケアの増加などにより、訪問看護師に求められる知識や技術も変化している。このような状況の中で、看護基礎教育においても在宅看護教育の充実が求められている。

本学の在宅看護論の授業でも、福祉用具を活用した日常生活援助の演習や、初回訪問の場面を想定してのロールプレイ、事例を設定しての看護過程展開等の演習を行っているが、在宅看護の特徴を踏まえた学習に向けてよりよい授業方法を模索中である。そこで、既存の研究をもとに、在宅看護論の授業方法とその方法によって得られた学習成果を明らかにし、効果的な授業方法について示唆を得たいと考えた。今回はこのうち在宅看護論演習の授業方法と学

習成果についてまとめたので報告する。

II. 研究目的

在宅看護論の演習について、文献をもとに授業方法とその授業方法によって得られた学習成果を明らかにする。

III. 研究方法

1. 研究期間

平成18年6月から平成19年8月まで。

2. 研究対象

医学中央雑誌Web (Ver. 4) をデータベースとし、「在宅看護論」「在宅看護学」「在宅看護実習」をキーワードとして文献検索を行った。検索範囲は保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則に在宅看護論が位置づけられた平成9年以降としたところ、60件が検索された。これらの文献のうち、①原著論文であること、②授業方法が明示されていること、③学習成果が明示されていることの3点を研究対象の条件としたところ、34件の文献が該当した。本研究ではこのうち演習に関する7件³⁾⁻⁹⁾を対象とした。

1) 川崎市立看護短期大学

3. 分析方法

- 1) 第1段階：それぞれの論文より、授業方法とその方法によって得られた学習成果を読み取り、一覧に整理し概観した。
- 2) 第2段階：学習成果として挙げられた内容のうち、多くの記述が見られていたグループ学習によるものとロールプレイによるものに着目した。第1段階のデータより、グループ学習による学習成果とロールプレイによる学習成果をすべて抜き出し、内容を要約し、類似のものをカテゴリ化した。

4. 用語の定義

1) グループ学習

グループ学習とは、「小集団をひとつの単位として学習を進める学習形態」で、クラスをグループに分割して学生同士の自主性と協力によって相互に学習し合う方法である¹⁾。本研究においてグループ学習とは、「小集団をひとつの単位として、テーマに沿って学習を進める学習形態」とした。

2) ロールプレイ

ロールプレイとは、看護演習においてある看護場面を設定し、医師・患者・看護師の役割を決めそれを演じるにより、コミュニケーション、患者指導、患者の不安の理解など、学生や看護師が参加して実際に近いかたちで学習することをいう²⁾。本研究においてロールプレイとは、「ある看護場面を設定し、療養者・家族・看護師などの役割を決め、それを演じること」とした。

IV. 結果

1. 対象文献の概観

対象となった7文献から得られた授業方法とその学習成果を表1に示した。このうち1件は実習前の準備として行った演習であり、残りの6件は演習科目に関するものであった。

授業方法は看護過程展開が5件で、このうち2件は看護計画立案までを行い、残りの3件はロールプレイによる模擬的な実施までを行っていた。そのほかに地域の社会資源地図作成が1件、補助器具センターでの校外授業が1件あった。

看護過程展開に関するもののうち学生が展開した看護過程の内容を分析したものは2件であり、「計画

立案できた割合が多かった分野は『家族への指導』『訪問看護の役割』『療養者へのケアの実施』『療養者の同意を得る』『療養者のアセスメント』であり、不足した割合が多い分野は『情報の共有』『協働者との連携』『経済的問題』などであった。「家族の介護疲労等の精神面には目が行きやすいが、療養者の意欲などの精神面をアセスメントし、援助内容に挙げるのは難しかった」等の学習成果が得られていた。

地域の社会資源の地図作成では、「関連施設を地図上にプロットしていく作業を通して、分布状況やアクセス方法、さらにそれぞれの施設間の空間的なつながりが見えた」「講義ですでに学んだことが、学生の中に単なる言葉としてではなく、内容を持った広がりのある事象として入り込んだ」等の学習成果が得られていた。

補助器具センターでの校外授業では、「福祉用具や住宅改修が、療養者と介護者（および看護者）両者のQOLを向上させることを学んだ」等の学習成果が得られていた。

2. グループ学習による学習成果

グループ学習による学習成果の記述があった文献は4件であり、そこから14の内容が取り出された。これらをカテゴリ化したところ、グループ学習による学習成果として、【他者の考えに触れて認識が広がる】【在宅看護に必要な視点を体験する】【チームの協働を学ぶ】【他者への説明の役割を学ぶ】の4つのカテゴリが得られた（表2）。

【他者の考えに触れて認識が広がる】には、「意見交換の中でいろいろな気づきができた」「状況に応じた様々な援助方法があることを学んだ」など5つの内容が含まれていた。学生は他者の意見を聞いて新たな気づきをしたり、自分とは違う物の見方や価値観に触れることにより、認識を広げていた。

【在宅看護に必要な視点を体験する】には、「目標の優先度を考えることを通して、対象のQOL向上をどう捉えるかを深く考える体験ができた」「事例の生活背景を捉えるための討議を通して様々な生活観に触れ、療養生活や家族をありのままに捉える大切さを感じた」など4つの内容が含まれていた。学生はグループで看護問題の優先順位を考える際に、その人にとって何が一番大切かを真剣に議論することを通して、対象のQOLをどう捉えるかによって目標や優先度が変わってくることを学んだり、事例

表 1 在宅看護論演習における授業方法とその学習成果

文献	授業方法	学習成果
1	＜グループワークによる看護過程展開＞ 事前学習後、4～5名のグループで教員が提示した事例の看護過程を展開する。	<ul style="list-style-type: none"> ・目標の優先度を考えることを通して、対象のQOL向上をどう捉えるかを深く考える体験ができた。 ・自分とは違う対象理解を互いに認識しあうことによって、対象の全体像が深められることに気づいた。 ・状況に応じた様々な援助方法があることを学んだ。 ・看護者のケア説明責任に気づいた。 ・生活全体を調整するために関連職種や地域の人々との連携・協働が必要であることを学んだ。 ・グループ学習の体験を通して在宅看護に必要な柔軟な考え方を受け入れていくようになった。 ・対象を理解して看護計画を立てるという看護者の役割を演じることににより、看護者としての立場や意識を感じていた。 ・発表を通して論理的に分かりやすく伝える難しさや発表方法を学んだ。
2	＜看護過程展開＞ 教員が提示した事例について、学生各自で計画立案までを行い、その後グループで看護診断の優先順位とその根拠を討議する。その後クラス全体で各グループの発表・討議により思考を拡大し学習内容を共有する。	<p>＜看護診断ラベルの分析＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・診断ラベル数の平均は療養者3.8、家族1.5であった。 ・療養者の心理的側面からも診断が上がり、全体的に対象を捉えられていた。 ・パターン別診断ラベルでは、事例がペーパーベースのため情報が不足していることもあり、11パターンのうち5～7のパターンであった。「知覚-健康管理パターン」「価値-信念パターン」は臨地実習と同様にあまり診断として決定されていない。 ・診断の根拠となる診断指標については、主観的な情報に基づく根拠が多い傾向にあった。
3	＜看護過程の事例を用いた技術演習＞ グループで提示された2事例のうち1事例を選択する。看護過程を展開し、そこから導き出された看護について①日常生活援助技術②治療処置に伴う援助技術を1項目づつ実施する。日常生活援助技術は援助場面の発表会を行い、治療処置に伴う援助技術は実施上の意図や留意点を紙面やVTRまたはデモストレーションの形態で発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ・実技を実施することにより、看護過程の演習では気づけなかった情報（細かい療養者の病状や心理面、家族、住居環境など）にも目を向け、事例をより深く現実的にイメージすることにつながった。 ・看護過程展開から技術演習まで同じ事例を用いることで、事例をより深く現実的にイメージすることにつながった。 ・グループ内で事例の生活背景をとらえるための討議を通じて、様々な生活観に触れ、療養生活や家族をありのままにとらえる大切さを感じた。 ・他グループの発表をみてイメージできた。 ・ALS患者の在宅での設定は、学生にはイメージが困難だった。 ・言葉遣いやマナーに留意し、家庭に入ることはプライバシーに関わることに認識していた。 ・療養者の状況や生活に合わせた用具の工夫（服薬箱の作成等）がみられた。 ・家族の方法を支持しながらの励まし、介護者へのねぎらいの言葉かけや体調の気遣い等の行動がとれていた。 ・コミュニケーションについての意識付けとなった。
4	＜ロールプレイを用いた看護過程展開＞ 演習前に学生各自で提示された事例に関する情報の整理を行い、グループ毎に看護過程にそった訪問日のケア計画を立案する。ケア計画にそって援助技術を検討し、ロールプレイで発表する。	<p>＜ケア計画の分析＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ケア計画は療養者への援助が最も多く、身体面や症状に対する援助であり、現在の看護上の問題についての援助は少なかった。 ・家族の介護疲労等の精神面には眼が行きやすいが、療養者の意欲などの精神面をアセスメントし援助内容にあげるのは難しかった。 ・病気や障害に関した具体的な身体面の情報の活用は多いが、今までの経過や習慣、生き方などの個別性に関する情報の活用は少なく、学生は疾患や障害を中心に患者理解を進める傾向が示唆された。 ・専門職間の連携に関する記述は少なく、チームケアについての指導が課題としてあげられた。 <p>＜ロールプレイによる学習成果＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ロールプレイ実施において、療養者の病状に即したケアの方法や手順、ポイントは具体的にイメージでき、援助を実施していた。 ・患者体験を通して、心理面などの患者理解が深まった。 ・演習中、不明な点を確認する、基礎技術を何度も役割を変えながら体験しあう等、積極的に学ぶ姿勢がみられた。 ・ロールプレイの実施により、在宅看護のイメージ化をはかることができ、実習への動機づけとなっていた。
5	＜援助場面のVTR作成＞ 教員が提示した3事例から選択した1事例（2年目は学生が設定した自作の事例でも可とする）に対する援助場面のVTRをグループ毎に作成し発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ・他のグループの援助を見て、理解が深まった。 ・意見交換の中でいろいろな気づきがあった。 ・物品の工夫について興味を持てた。 ・個々の療養者や家族に合わせた指導や看護を考えていく必要性を理解できた。 ・撮影しながら援助の練習になった。 ・グループでVTRを作成する過程で様々な家族関係をイメージしながら、援助方法を工夫する楽しさを実感できた。 ・2年目は10グループ中4グループが自作の事例設定をしており、援助場面・方法の幅が広がった。
6	＜地域の社会資源地図作成＞ グループ毎に患者の状況を設定し、設定患者に必要なとされる社会資源、連携状況、それらにアクセスするための連絡方法、交通網などをできるだけ詳細にマップ上に記入する。発表は他のグループメンバーが患者・家族となり当該グループが説明・指導する。	<ul style="list-style-type: none"> ・関連施設を地図上にプロットしていくという作業を通して、それらの分布状況、そこへのアクセス方法（駅からの距離や、交通手段）さらにそれぞれの施設間の空間的なつながりが見えた。 ・講義ですでに学んだことが、学生の中に単なる言葉としてではなく、内容を持った広がりのある事象として入り込んだ。 ・患者と家族に説明・指導するという実践を入れたことで、学習効果が高められた。 ・グループワークについては、一人ではできないこともグループだからできた、メンバー間の連携を通しチームナースングに役立てることができると感じた、協力することの大切さと難しさを学んだという肯定的な意見があった一方、1グループの人数が多すぎ一人一人の責任感が薄まる、役割に偏りができ作業の分担の割合に差ができた、動きずらく話し合いもスムーズに行かない、まとまりが悪い、リーダー役が必要となるという否定的な意見もあった。
7	＜補助器具センターでの校外授業＞ 補助器具センターにおいて、職員（看護師・福祉用具プランナー）による講義、デモンストレーション、実技演習（福祉用具を活用した療養者・看護者体験）を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・福祉用具や住宅改修が療養者と介護者（および看護者）両者のQOLを向上させることにつながることを学んだ。 ・体験や実際の事例紹介により、福祉用具を身近なものとしてとらえ、有用性を認めていた。 ・看護技術について、器具を活用することにより、さらに負担なく安全に行うことができると、自らの看護技術を考える契機となっていた。

表2 グループ学習による学習成果

カテゴリ	内容
他者の考えに触れて認識が広がる	意見交換の中でいろいろな気づきがあった 自分とは違う対象理解を互いに認識しあうことによって、対象の全体像が深められることに気づいた 状況に応じた様々な援助方法があることを学んだ 他グループの発表をみてイメージできた 他のグループの援助を見て、理解が深まった
在宅看護に必要な視点を体験する	目標の優先度を考えることを通して、対象のQOL向上をどう捉えるかを深く考える体験ができた グループ内で事例の生活背景をとらえるための討議を通じて、様々な生活観に触れ、療養生活や家族をありのままに捉える大切さを感じた グループでVTRを作成する過程で様々な家族関係をイメージしながら、援助方法を工夫する楽しさを実感できた グループ学習の体験を通して在宅看護に必要な柔軟な考え方を受け入れていくようになった
チームの協働を学ぶ	協力することの大切さと難しさを学んだ 生活全体を調整するために関連職種や地域の人々との連携・協働が必要であることを学んだ メンバー間の連携を通し、チームナースングに役立てることができると感じた
他者への説明の役割を学ぶ	看護者のケア説明責任に気づいた 発表を通して論理的に分かりやすく伝える難しさや発表方法を学んだ

の生活背景を捉えるための討議を通して様々な生活スタイルに触れ合うことで、人それぞれ多様な生活観があることに気付いたり、対象をありのままに捉える大切さを感じたりと、講義で学習した在宅看護に必要な視点を単なる言葉としてではなく身をもって体得していた。

【チームの協働を学ぶ】には、「協力することの大切さと難しさを学んだ」「メンバー間の連携を学び、チームナースングに役立てることができると感じた」など3つの内容が含まれており、チームでの協働について体験的に学んでいた。

【他者への説明の役割を学ぶ】には、「発表を通して論理的に分かりやすく伝える難しさや発表方法を学んだ」「看護者のケア説明責任に気づいた」の2つの内容が含まれており、話し合いや発表の中で自分の考えを根拠を持って伝える技術と困難さや、さらにそれが看護者の役割のひとつであることを学んでいた。

3. ロールプレイによる学習成果

ロールプレイによる学習成果の記述があった文献は4件であり、そこから12の内容が取り出された。これらをカテゴリ化したところ、ロールプレイによる学習成果として、【現実的な対象のイメージ化につながる】【個別的な援助方法を工夫する】【訪問看護に求められる態度を学ぶ】【援助技術を習得する】の4つのカテゴリが得られた(表3)。

【現実的な対象のイメージ化につながる】には、「看護過程の演習では気付かなかった細かな情報にも目を向け、事例をより深く現実的にイメージすることにつながった」「患者体験を通して、心理面などの患者理解が深まった」など3つの内容が含まれ

ていた。ロールプレイを実施する際、より細かい療養者の病状や家族、住居環境など具体的な対象の情報が必要となり、さらには療養者や家族の心理面にも目を向けるなど、より現実的に事例をイメージすることにつながっていた。

【個別的な援助方法を工夫する】には、「様々な家族関係をイメージしながら、援助方法を工夫する楽しさを実感できた」「療養者の状況や生活に合わせた用具の工夫(服薬箱の作成等)がみられた」など4つの内容が含まれていた。学生は計画した看護を実施する際に、療養者の病状に即したケアの方法や手順で実施することができていた。また対象の個別性に合わせた様々な工夫を考えていた。

【訪問看護に求められる態度を学ぶ】には、「言葉遣いやマナーに留意し、家庭に入ることはプライバシーに関わるものと認識していた」「家族の方法を支持しながらの励まし、介護者へのねぎらいの言葉かけや体調の気遣い等の行動がとれていた」など3つの内容が含まれていた。学生は訪問看護実習の体験前であるにもかかわらず、既習の学習内容を踏まえて、その場にふさわしい態度を考えながら実施していた。

【援助技術を習得する】には、「援助の練習になった」「不明な点を確認する、基礎技術を何度も役割を変えながら体験しあう等、積極的に学ぶ姿勢がみられた」の2つの内容が含まれ、繰り返し練習することで援助技術の習得につながっていた。

V. 考察

在宅看護論演習におけるグループ学習による学習成果として、学生はグループ学習での議論を通して多様な考え方に触れ、認識を広げていた。それだけ

表3 ロールプレイによる学習成果

カテゴリ	内容
現実的な対象のイメージ化につながる	看護過程の演習では気づけなかった情報（細かい療養者の病状や心理面、家族、住居環境など）にも目を向け、事例をより深く現実的にイメージすることにつながった 患者体験を通して、心理面などの患者理解が深まった ロールプレイの実施により、在宅看護のイメージ化をはかることができ、実習への動機づけとなっていた
個別的な援助方法を工夫する	ロールプレイ実施において、療養者の病状に即したケアの方法や手順、ポイントは具体的にイメージでき、援助を実施していた 個々の療養者や家族に合せた指導や看護を考えていく必要性を理解できた グループでVTRを作成する過程で様々な家族関係をイメージしながら、援助方法を工夫する楽しさを実感できた 療養者の状況や生活に合わせた用具の工夫（服薬箱の作成等）がみられた
訪問看護に求められる態度を学ぶ	コミュニケーションについての意識付けとなった 言葉遣いやマナーに留意し、家庭に入ることにはプライバシーに関わるものと認識していた 家族の方法を支持しながらの励まし、介護者へのねぎらいの言葉かけや体調の気遣い等の行動がとれていた
援助技術を習得する	撮影しながら援助の練習になった 演習中、不明な点を確認する、基礎技術を何度も役割を変えながら体験しあう等、積極的に学ぶ姿勢がみられた

でなく、相手の考えを受け入れたり、自分の考えを論理的に説明することなど、グループ学習の学習成果には様々な要素が含まれていた。

在宅看護では、対象の生活の中で生ずる様々な問題に対応する必要がある。また、生活者である対象は治療を目的に入院している患者とは療養に対する意識や価値も異なっており、多様な考え方を受け入れることや対象の価値観を尊重する態度が求められる。グループ学習において価値観の多様性に気づき、これを受け入れる体験は、こうした在宅看護に必要な態度の育成に役立つと考えられる。

また、他者と協働してひとつのことを成し遂げるグループ学習では、他者に自分の考えを説明したり、チーム内で協力しあうことが必要となる。介護保険制度において訪問看護は利用者との契約によって実施されており、利用者やその家族に提供する看護サービスについて分かりやすく説明する役割が求められている。また、福祉職など専門性の異なる他職種や、利用者ごとに異なる医療機関との連携や協働が求められ、グループ学習での学びがこうした在宅看護に必要な能力の育成につながると考えられる。

ロールプレイについては、紙面上でアセスメントや計画立案を行うだけでなく、立案した看護計画の実施までを擬似的に行うこととなる。この時、曖昧な漠然としたイメージでは状況を表現することができず、より細かな対象設定が必要となる。学生はこのプロセスを通して、在宅療養者やその家族の生活状況を考えたり、心理面に着目していたのではないかと考える。学生は自身の生活体験が乏しいことや、演習時の段階で訪問看護実習を経験していないことなどから、在宅看護の対象像をイメージすることが難しい状況にあるが、ロールプレイを行うことによって、生活者としての対象をより現実的に捉えること

ができていた。

また在宅看護では、療養者の状況だけでなく家庭内で使用可能な物品や家族の介護能力など、様々な家庭環境や生活の状況に合わせて援助方法を工夫することが求められる。学生は対象を具体的にイメージしながら看護師役割を演じる中で、対象の個別の状況に合わせた援助方法について考えたり、対象に合わせた用具の工夫にも発展させていた。さらに、在宅看護では対象の自宅で看護を提供するため、医療施設での看護とは異なる配慮が求められる。ロールプレイを行うことにより、言葉遣いやマナーをはじめ家族への気遣いなど、訪問看護者として求められる行動を考える機会となっていたと考えられる。

以上のように、在宅看護論演習での看護過程展開にロールプレイによる模擬的な実施を取り入れることによって、生活者としての対象を捉える、様々な家庭や生活の状況に合わせて援助方法を工夫する、自宅で看護を提供する上での配慮などの在宅看護の特徴を、体験的に学習できることが示唆された。

その一方でデメリットとして、グループ学習では「1グループの人数が多すぎ、一人一人の責任感が薄まる」「役割に偏りができ、作業の分担の割合に差ができた」という点が挙げられていた。効果的なグループの人数は4～6人¹⁰⁾、6～7人¹¹⁾と諸説あるが、少なすぎても考えや意見が十分なくクリティカルシンキングや問題解決が促されないため¹²⁾、学習内容に応じた人数設定が必要であろう。また、ロールプレイでは「時間がなく大変だった」という学生の意見もあり、ロールプレイを取り入れる際は学生の余裕がある時期を考慮する必要性も述べられていた。

VI. おわりに

在宅看護論演習について、文献をもとに授業方法

とその学習成果について分析を行った。特にグループ学習とロールプレイに焦点を当てて分析したところ、在宅看護に必要な態度や視点を体験的に学習できることが示唆された。一方で、在宅看護論演習に

ついて、授業方法とその学習成果が示されている研究はまだ数が少ない。今後、今回の研究結果を踏まえ、本学の在宅看護論で行っている看護過程演習等に反映させ、その成果を公表していきたい。

文献

- 1) 村本淳子. わかる授業をつくる看護教育技法2 討議を取り入れた学習法. 医学書院, 2001, 206P.
- 2) 大橋優美子, 他. 看護学学習辞典. 学習研究社, 1997, 1093p.
- 3) 高井俊子, 岡本啓子. 在宅看護をグループ学習で学ぶ重要性. 看護教育. 46, 12, 2005, p. 1120-1126.
- 4) 今村桃子, 長尾秀美. 在宅看護論における看護診断に関する考察－看護過程演習における事例展開を通して－. 聖マリア学院紀要. 17, 2002, p. 41-45.
- 5) 鷹居樹八子, 中尾理恵子, 門司和彦, 石原和子. 在宅看護論実習前のロールプレイにおける看護内容評価と教育的効果. 長崎大学医療技術短期大学部紀要. 14, 1, 2001, p. 111-116.
- 6) 高野真由美, 露木美和子. 在宅看護論における看護過程の事例を用いた技術演習. 神奈川県立平塚看護専門学校紀要. 8, 2001, p. 11-17.
- 7) 中田芳子. VTRを活用した「在宅看護論」演習方法の検討. 日本看護学会論文集(地域看護). 31, 2001, p. 30-32.
- 8) 高波澄子. 社会資源を知る－札幌市各区毎の社会資源(人的・物的)地図作成を通して－. 看護総合科学研究会誌. 3, 1, 2000, p. 3-8.
- 9) 猿田貴美子, 江藤和子, 丹下純子. 在宅看護論において福祉用具・住宅改修の必要性を見る視点を育てる－補助器具センターでの校外授業を実施して－. 神奈川県立病院附属看護専門学校紀要. 8, 2004, p. 18-23.
- 10) D. L. ウルリッチ, K. J. グレンドン. 看護教育におけるグループ学習のすすめ方. 医学書院, 2002, 136p.
- 11) 前掲1)
- 12) 前掲10)